

これまでの読書内容は・・・(目次より)

はじめに

序章 「旧約聖書」と「新約聖書」

- ユダヤ教とキリスト教
- ユダヤ教の聖書とキリスト教の「旧約聖書」
- ギリシャ語訳とラテン語訳聖書
- 「正典」、「外典」、「偽典」
- 「新約聖書」
- 「正典」と「外典」

第一章 ユダヤ教の成立とモーセ五書の編纂

- 民族宗教としてのユダヤ教
- 古代イスラエル史概観ーユダヤ教の成立まで
- モーセ五書ー選民と律法
- 人類の原初史
- アブラハム契約
- 出エジプト物語
- シナイ契約
- 民の反抗
- モーセ五書の使信

預言者 (p89-113)	←----- 今回の読書範囲(6/1)
前の預言者ー申命記史書	
①王制成立	
②ダビデ王朝イデオロギー	
③ヤロブアムの道	
④南ユダの王たち	
⑤バビロン捕囚と申命記史家	
後の預言者ー審判預言と救済預言	
①預言者の系譜	
②審判預言	
③救済預言	
④預言者と預言書	
モーセ五書の編纂と「預言の終わり」	
モーセ五書への系譜	
ヘブライ語聖書の歴史観	

振り返って本書の目的って何?・・・「はじめに」から抜粋してみた。

・本書は「旧約聖書」と「新約聖書」について、その成立経緯と相互関係について解説することを目的としている。(p7-13)

・本書の意図するところは、まずはユダヤ教とヘブライ語聖書の成立、その後の時代のユダヤ教の展開とそこから生まれてくるキリスト教および新約聖書について、一冊でその全体像を概観できるようにすることである。(p9-3-5)

・多くの解説書は、・・・踏み込まないし、・・・注意を払わない。・・・多様性まで踏み込んだ解説は望めない。本書はこうした空隙を埋めることを一つの目的としている。(p9-5-10)

・歴史叙述でありつつ、それぞれの時代に生み出された聖書およびその他の文献を解説することで、全体としては古代ユダヤ思想史(および初期キリスト教思想史ないし神学史)になるはずである。

・この思想史の叙述においては、とくに「義なる神」という表象にまつわる諸問題—いわゆる神議論—に注目する。これはユダヤ教の中心的な神理解であるとともに、キリスト教の救済論とも深くかかわる。さらにそれは「倫理」の問題とも関係してくるのだが、それこそが「聖書」の暴力を生み出す源でもあると思われるからである。(以上 p9-11,p10-1)

・序章では「旧約」「新約」という呼称の問題を、ユダヤ教とキリスト教の関係から概観するとともに、聖書の目次をとおして「聖典」ないし「正典」ということの問題を論ずる。

・第一章は古代ユダヤ史を概観しつつ、ユダヤ教の伝統における聖書の三分の最初の二つ(「モーセ五書」と「預言者」)の大雑把な内容と成立経緯を解説する。

・第二章では、その後のユダヤ史を概観しつつ、「諸書」およびその他の古代ユダヤ教文献を紹介するとともに、キリスト教の生まれるまでの時代を解説する。

・第三章ではキリスト教の成立・発展と「新約聖書」各文書の成立経緯を解説する。

・最後に、「聖書」にまつわる暴力の問題と「神学」の問題を「言葉」というものを切り口に考察する。(以上 p8-1-9)

・本書は「聖書」を「聖なる書物」としてではなく古代ユダヤ人および初期キリスト教徒の生み出したあれこれの書物としてあつかう。

・聖書はそれが「聖なる書物」とされる限り、それを「聖書」とする人間の暴力を生み出し続けてしまう。

・「聖書」はまったくもって「聖なる書物」ではないし、「神の言葉」でもない。それは人間の言葉に過ぎない。

・聖書にはたくさんの著者・編集者がいる。・・・各書物の間には・・・お互いに矛盾し合い、対立する考えが多く存在する。一貫した神学や中心的な思想なるものはない。

・聖書は寡黙にして雄弁である。寡黙であるとは、いきなり読んでも何が書いてあるのかさっぱりわからない・・・雄弁であるとは、たいていの考えは聖書の適当な箇所によって正当化できるからである。寡黙であるがゆえに、好き勝手な解釈が可能なのだ。だからこそ他人の意見をただ受け入れるのではなく、自分なりに解釈を試みて欲しいと思う。それは自己絶対化・正当化のためではなく、あらゆる解釈を相対化するためである。それが「聖書」の暴力を無力化し、そこから学ぶための唯一の方法なのである。(p10-p11)

今回の対象範囲「預言者」の論旨展開の流れ・・・(最後の図も参考)

前の預言者－申命記史書 ヨシュア記、士師記の内容。申命記史家の歴史観概説。		コラム「歴史とは」 意図的な編纂
①王制成立 サムエル記・・・王制の開始 王制について否定・肯定の2つの考えがあること、 <u>王制は妥協の産物、メシアの起源</u>	②ダビデ王朝イデオロギー ダビデ・ソロモンの時代に <u>統一国家となり、ヤハウエを国家護持神とするイデオロギー</u> 生まれる	③ヤロブアムの道 反乱発生。統一国家の終焉。 <u>南北に分かれる。</u> <u>王権の正当性が揺らぐ。</u> 神に背く行為(他の神々)
④南ユダの王たち 強国アッシリアへの対応を迫られ、ヤハウエ神と他の神々の間で信仰が揺れ動く。強国に追従すると神への背信として申命記史家の批判の対象となる。これの繰り返し。	⑤バビロン捕囚と申命記史家 最終的にバビロニアに敗北、王国滅亡、捕囚されるが、 <u>神の敗北でなく神の罰なのだ</u> と解釈される	コラム哀歌 惨劇の詩 集だが、神の罰と回帰
		コラム申命記と申命記史書著者否定

後の預言者－審判預言と救済預言	
①預言者の系譜 預言者もいろいろ。南北に別れ継承される。王制に批判的な者(元来は王制は妥協産物)一方でダビデ王朝イデオロギーの担う者。	②審判預言 王制批判の預言者アモスから <u>選民イスラエル全体が裁きの対象</u> とされる。またヤハウエ宗教が排他的唯一神教へと変化した。その思想は預言者ホセアに受け継がれ、北の滅亡はその預言成就とされた。南へも伝播。結果的にバビロン捕囚も預言成就と信仰。
③救済預言 捕囚時代の預言者は <u>罰の後の再興を語る</u> 。南はメシア待望論。	④預言者と預言書・・・トラーから預言者を分けた理由＝民族全体に係わる預言は自らの罪への罰で、<u>歴史として伝え、救済期待。</u>
コラム 苦難の僕 代贖思想であるが、これを簡単に美化するのは大変危険。	コラム 正義と倫理の陥穽 「義なる神」出現 倫理が神の名のもとに絶対化される
コラム 預言者たちのダビデ王朝イデオロギー 南の預言者に強く残る。メシア預言。	

モーセ五書の編纂と「預言の終わり」 預言の終わり＝大祭司による神殿体制の強化 そのためモーセを最大の預言者として以降預言を不要とし、モーセ五書さえあれば十分とした。	モーセ五書への系譜 預言者たちの使信＝ <u>審判預言＋救済預言</u> に集約 <u>「罪→罰→救済」</u> が全体の流れ。申命記史書はイスラエル民族史版。この後モーセ五書を最終編纂した。
コラム ユダヤ教の祭司職 世襲制だが現実異なる。序列発生。	コラム 四書、六書、九書？ 五書という構成への疑問。研究中。

預言者 (p89-113)

前の預言者—申命記史書

モーセ五書以降の四書＝「申命記史書」(申命記の思想を共有)

モーセ死後→「ヨシュアの時代→士師の時代→王国の時代→バビロン捕囚」までの歴史が記述されている。

よって最後に編纂した者は、「王国滅亡&バビロン捕囚」(の苦い経験をしているので)が起こった原因を説明するための歴史書としたはずである。

- (1) ヨシュア記—イスラエルの民のカナンの地への侵攻&征服の物語
- (2) 士師記—ヤハウエを棄て他の神々に仕えたので
 - 神の怒り→イスラエルが敵の手へ渡る
 - 民が苦しむ
 - 士師(「裁く者」)を指導者として立てて民を救う
 - 士師の死後は再び他の神々に従うので繰り返しになる。
- (3) 申命記史家の考え方、そして編纂の流れ
 - 以上の説明には申命記史家の歴史観がはっきりと表示されている。

即ち、イスラエルの民が他の神々仕えるという罪を犯し、
 ⇔ それに対する罰としてイスラエルが他者に支配される
 この繰り返しの結果、最終的にバビロン捕囚になったということ。

さらに考えを進めると、
 「他の神々に仕える」ことになったのは
 ⇔ カナンの先住民を追い出さずにいたことで、
 実はこれは将来罪を犯すことになる「罫」であったのだと。

結局、つきつめると
 そのような、「罫」を避けさせるためには、
 ⇔ 神から与えられた約束された土地なら、先住民は排除されて当然だから、
 おそらく神は指導者に根絶するようあらかじめ命じているはずである。
 ・・・・いや、きっとそうであったはずだ・・・
 という考え方が成り立ち、(あとから)モーセの時から「先住民根絶」が指示されていたはずだったとして、そういうストーリーに編纂された。

【コラム；「歴史とは」】 歴史家の探求とその結果の歴史書

このような意図的な編纂が行われたということは、ある意味当然の結果である。当時の歴史家はその時点からさかのぼって歴史の探求をすすめて行く時、過去の出来事の流れの中から、相互に関連し意味づけのできるものを取捨選択していく。そして探求者である歴史家の考え方が、過去の歴史の流れとやはり結びついてたと確信した時に、今度はもう一度時系列的に並べ一つの歴史として物語る(=形作る・編纂する)

「先住民を根絶せよ」という相当に残酷な命令があたかもあったかのように編纂されたのも、(3)のような史観を説明する事のほうが重要だったからである。(実際にそうされたかどうかということよりも)

①王制成立

最後の士師サムエルのとき王制になる。

なぜ、王制が必要だったのか。

サムエル記では、民が「他の国々のように」王が欲しいと願った

⇔ヤハウエは王を持つことに不快を表し、
王を持つことに警告を与え、
るが、結局は
王を立てることを受け入れ、
サウルを最初の王に選ぶ

王についての2つの考えがあることを反映している。

- ・王に否定的(サムエル&神)

⇔神のみが(本来の)「王」であり、
人間が王となり人間を支配するのは認めない(出エジプトの時
「奴隷を解放する」というようなことをしたのは神!)

- ・すでに実在する王を正当化・絶対化したいという気持ち

⇔「王権神授」と言う形で妥協することになった。

結果として歴代の王は神の目から見て「正しい」事をした者たちと
「悪とされる」ことをした者たちに分けられている。

(注)「メシア」の起源(イスラエルの新王の即位時に頭に油をそそぐ)

②ダビデ王朝イデオロギー

ダビデ&ソロモンの時代、イスラエルを統一して全部族の王となった。

ヤハウエのイメージを逆転させ、王権を正当化する根拠とした。

- ⇨ エルサレムに神の箱を安置、さらに神殿を建てる
つまり、神は特定の場所に住まないはずだったのを首都エルサレムの神殿で神が臨在する象徴とした。

- ⇨ 神がダビデに永遠の王朝を約束したことになっている。
ヤハウエは国家護持神、目指したのは中央集権国家。
(呼称「メシア」、「ダビデの子」、「神の子」はこのイデオロギーを象徴)

③ヤロブアムの道

しかし、統一王国の終わり(ソロモンの晩年)には官吏ヤロブアムの反乱が起こり、王権の正当性がゆるいだ。

反乱の理由: ソロモンが臣民に強制労働を課したことが原因ではないか?

- これが申命記史家によると、
 - ⇨ ソロモンが多く外国人妻が持ち、彼女たちの神々を拝んで、ヤハウエの目にかなわない「正しくないこと」をした
(強制労働=人間による人間支配つまり神の意思に背くこと)

ソロモンの死後は統一国家は南北に別れる。

北イスラエルはヤロブアムを王とした。しかし、この王は聖所に金の子牛像を置いた。このことは後の申命記史家にとっては、ヤハウエに仕えず他の神々に仕えたことになり、北イスラエルの滅亡の理由とされた。彼の行為は神に背いた先祖の物語として編纂に利用された。

④南ユダの王たち

南ユダ王国はソロモンの死後もダビデ系の世襲で王位が続いた。が申命記史家にとってはあくまで個々の王が「ヤハウエの目に正しいことをしたか否か」の観点で評価している。

北イスラエル王国滅亡後～南ユダ王国滅亡までの4王の場合

・アハズ王：正しいことしなかった ×

⇒ 対アッシリア同盟（北イスラエル&シリア）への参加を拒み、逆にアッシリアに助けを求め、アッシリア式祭壇をエルサレム神殿に建設して恭順の意をしめした。
（伝統よりも国際政治を重視して、ひたすら国の滅亡を防いだけ・・・）

・ヒゼキヤ王：正しいことを行った ◎（最大限の賛辞）

⇒ ヤハウエ宗教を復興させ（エルサレム神殿から他宗教の要素を除く）、アッシリアからの独立の機会を窺っていたが、反乱は失敗。降伏。ただしエルサレムは征服されず、ユダ王国は属国として存続できたが、国家の滅亡の危機にさらしたことは間違いない。

・マナセ王：最悪の王 ××

⇒ 祖父アハズにならい、父の轍を踏まないようにした。アッシリアに恭順し、55年もの間支配し、結果的に平和と繁栄をもたらした。
当然ながら、アッシリア祭儀を取り入れ、ヤハウエ宗教は迫害した。

・アモン王： — （2年で暗殺）

・ヨシヤ王：（最大限の賛辞）◎

⇒ 神殿で発見されたとされるトーラーの書（「原申命記」）に基づき宗教改革を行いエルサレム神殿から他宗教の要素を排除した。
（実際にはヤハウエ神への回帰を強くすすめる申命記派主導の活動）

⑤バビロン捕囚と申命記史家

ヨシヤ王の後のユダ王国滅亡までの4人の王：悪とされることを行った ×

⇒ 強大な他国（エジプトと新バビロニア帝国）との関係に振り回される。
最後のゼデキヤ王のときバビロニアに反旗を翻したため、エルサレムは征服され、神殿は焼かれ、指導者たちがバビロンに捕囚されることになった。

【コラム：「哀歌」】 エルサレムの陥落に伴いユダの住民が経験した惨劇を嘆いた詩集

惨劇の嘆きは随所にあるが、やはり

悲劇の原因は神の怒りによりもたらされたこと

神への望み、罪を犯したことの告白、ヤハウェ神への回帰を決意すること、さらには、神に敵への復讐を願い出る

といった強烈な思考に満ちている。

- ・またこれらの考え方は古代の戦争観

「 国と国の戦争 = 国家神の戦い 」からも影響している

したがって、ユダ王国の敗戦＝ヤハウェの敗北を意味してしまう。

もし、それが正しいなら、他の神々を重要視した方がよいということになる。

だが、ヤハウェ神はイスラエル民族の神だから、そうなると民族のアイデンティティの危機にもつながる非常に危険な状態となる。

しかしここで、申命記史家たちは、この考えを逆転させ発想の転換をする。

ーイスラエルの民の悲劇はヤハウェ神から離れ他の神々に追随したことが原因で当然

ー実はヤハウェ神は敗北したのでなく、他国を使ってイスラエルの民を罰しただけ

ー逆にヤハウェ神こそが世界の唯一神だからそのようなことができ、

戦争＝国家神の戦いにはなっていないのだ

このような思想で民族のアイデンティティを再構築し、歴史書を編纂した。

(「原申命記」の思想、預言者たちの伝統の影響によるものと思われる)

【コラム：「申命記と申命記史書」】 申命記に関する疑問

モーセ五書の「申命記」自体が後の申命記史書の一部ではないか？

→ 著者による否定的見解：マルティン・ノートのこの考えは違うと思う。

後の預言者－審判預言と救済預言

①預言者の系譜

後の預言書：15人の預言者の名がある

しかしそれ以外の人物が「預言者」として多く登場する

(「モーセ五書」「申命記史書」)

(例：アブラハム、モーセ兄アロン、姉ミリアム、士師デボラ、サムエル)

その他、無名の預言者、預言者の仲間たち

あるいは「先見者」、「神の人」、「ヤハウエの預言者」「バアルの預言者」

預言者の詳しいこと、職業なのか召命か、その本質、など明確な合意はない。

預言者が神の言葉・神託を告げる存在ではある

職業であったこともある(宮廷預言者)

ダビデの側近「宮廷預言者ナタン」

ダビデ王に ヤハウエの言葉を伝え、
倫理に欠ける行為を叱責
後継者選定の画策

・・・など、ダビデ王朝イデオロギーの担い手

→ 南ユダ王国の預言者に続く

→ キリスト派誕生の思想的源泉となる

その一方で、王制に懐疑的・批判的な預言者もいた。

もともとヤハウエ宗教自体王制に批判的なため、王制は妥協の産物。

その預言者の伝統はダビデ王朝イデオロギーから距離をとる北イスラエルに継承された。

(例：預言者アヒヤはヤロブアムの反乱に加担していた。

エリヤとエリシャはオムリ王朝の転覆に加担など)

②審判預言

預言者アモスに王制批判の伝統が受け継がれる。

アモスの特徴：批判対象が王制のみならず+**民族全体 (New!)** が加わる
特に重要なのは

指導者+金持ち（民族の一部）不正を糾弾するが、
裁きは民全員（民族全体！）に降りかかる
こと。

理由：選民「イスラエル」が社会正義を実現しないなら、選民の存在理由がなくなり
選民ゆえに神に罰せられる

本来、特権「出エジプト」ができたのはイスラエルの民が選民であるからと理解されていたのが、
アモスは選民を単なる特権ではなく（責任あるいは使命を伴うもの？）した。

すべてはヤハウエ神の介入によってなされることで、別に出エジプトだけが特別でなく
他の諸民族を含めた世界史の中で神の介入がなされる。まさに唯一神だからである。

当然、他国との戦争の結果、イスラエルが敗戦あるいは征服される事もヤハウエによる
罰としてもたらされたのだという思考になる。

つまりヤハウエ宗教は拝一宗教（他の神々は否定しない）であったのが、アモスにより
排他的唯一神教（世界には一神のみ）という構造に仕上げられた。

【コラム：「正義と倫理の陥穽」】

ヤハウエ宗教の重要な伝統の一つ = 「人間による人間の支配を認めない」

預言者がこれを担い、社会的不正を放置しない神を強調した。

- 例；預言者アヒヤ → ソロモンの強制労働に反対
- 預言者エリヤ → 王による農夫の土地篡奪を告発
- 預言者アモス → 借金者を農奴にして売る者を非難

しかし、これら具体的な不正非難が続いていくと一般化され「義なる神」なるものが現れる。

「**義なる神**」は（人間から見た）「不正」を罰する が
（人間から見た）「正義」を義認する。

これが進むと一度できた「倫理」が神の名が付いたために「絶対化」されてしまう
（人が作った社会的・文化的合意の産物に過ぎないと言うのに！）

「絶対化」の結果「正しい」か「間違っている・はみ出している」の二極化して、
はみ出したイレギュラーは存続してはいけないことになる。したがって排除するには
暴力をつかってもかまわない。なぜなら神の名の下に定められた「正義」に反する
からである。

一般化した「正義や倫理」は枠から外れた者への暴力・抑圧として働く。

時代的・文化的制約を受けて人間の手になる書物群が「聖書」とされ、**神の名のもとに
正当化される時が、「宗教が暴力」となる時**である。

民族全体ないし王国への審判という思想は預言者ホセアに受け継がれる。

ホセアにとってはイスラエルはすでに「ロー・ハルマ」（憐れまぬ者）であり
「ロー・アミー」（わが民でない者）である。
つまりすでに裁かれる対象になっている（神から見て）。

この預言の成就是北イスラエル王国の滅亡となって現れたと信じられた。この見解は
南ユダ王国にも伝わり、南ユダ王国の預言者ミカ、イザヤ、ゼファニヤ、エレミヤ、エゼキエルたち
にも「民族全体への審判」として継承された。

結果的に南ユダ王国の滅亡とバビロン捕囚も預言の成就と信じられた。

【コラム：「預言者たちのダビデ王朝イデオロギー」】

(南ユダの) 預言者たちの特徴

民への裁き ← 審判預言の流れを継承
 将来の救済 → ダビデ王朝イデオロギー！が強く残っている

(例：預言者イザヤ → 理想的なダビデ系の王が出現して平和をもたらす
 エルサレムが世界の中心、諸国民が巡礼に来る、世界平和到来
 エレミヤ・エゼキエルもダビデ系の王の支配が理想とされている)

本来、ヤハウェ宗教は、王制に反対であったはず、それが、ダビデとソロモンによって
 国家護持神に変貌したヤハウェ神によって正当化された「理想の王 (人間！)」による
人間支配というダビデ王朝イデオロギーにどっぷり浸っており、それを受け継ぎ強化している。

この結果「メシア預言」というものができる。キリスト教はこの預言がイエスによって成就し
 たと主張するのだが、本来王朝イデオロギーから発生したものであるから、人間による人間支配を
 正当化してしまうという暴力性をなくしてしまうことはできない。

むしろ暴力性を内在しているといってもよく、その起源はダビデ王朝イデオロギーに
 基づく「**メシア (=ダビデの子) 預言**」に象徴される。

③救済預言

バビロン捕囚期の預言者エレミヤ、エゼキエル、無名（第二イザヤ）は
 救済預言を語った。

理由：王国の滅亡～バビロン捕囚は審判預言による裁きの結果、ヤハウェの罰である。
 罰を受けたあとは、放置されたままではなくイスラエルの再興があるはずであるから。

ただし、南ユダの預言者の特徴として、救済預言にはダビデ王朝イデオロギーが前提
 にあるので、ダビデ系のメシア待望論・エルサレム中心主義が伴う。

預言者エレミア → (救済預言として) 神と民の「新しい契約」を語る！

「新契約」！は後のキリスト派においてイエスで実現したとの主張へつながる

【コラム：「苦難の僕」】

第二イザヤの「僕の歌」と呼ばれる4つの詩の最後の詩「苦難の僕の詩」での「僕」について諸説があり、決着はされていない

「僕」は「われら」を執り成すために代贖死、贖罪死したとされているが、

ーイスラエルの民を指す「集団説」

ーモーセ、第二イザヤ自身、ダビデの末裔、メシアなどの特定の「個人説」

ーそれらの複合説

など、あるが、この詩は後にイエスの弟子たちによってイエスの死を説明するものとして解釈された。つまりこの詩はキリスト信仰の生みの親となったもの。

「代贖を一般的な思想として喧伝することの暴力性」

「代贖思想」＝ 自己犠牲の美名のもとに他者に苦難を強いるか、あるいは不条理な死を体験させられた身近な人びとにその死を美しく意味づけて勝手に説明しきってしまう

＝ (もしそうなら)「靖国」と同じ

＝ 要するに人身供犠、けして一般に広められることが好ましい思想などではない。あくまで当事者の心の内面から出てくる一つの表現であり、第三者が触れ回る思想などでは決してない。

唯一絶対の真理として他人に押し付けたりすることは(ありがちだが)極めて有害!

より遅い時代の預言者ハガイ、ゼカリヤ、第三イザヤ、マラキはバビロン捕囚から帰還した後のエルサレム神殿再建とそのあとの祭儀の再確立とかかわっている。

④預言者と預言書

疑問：なぜ15人の預言者たちの言葉は「(後の) 預言書」という別の書物の形で残されているのか？

(エリヤ、エリシャの言動は他の歴史物語の中に埋め込まれている)

理由：記述預言者(書物に名前を記する預言者)の預言は民族全体にかかわっていて、南北両王国の滅亡、バビロン捕囚、その後の復興に関係する

⇨ 王国滅亡などが記述預言者たちの審判預言の成就と見なし、後世に伝えるべきと考えたから

ユダヤ民族にとっては屈辱の歴史には違いないが隠さず、自らの罪に対する罰として受け止め、民族の歴史として伝えるべきとした。

さらには、審判預言が成就したのだから救済預言も成就するはずという希望も伝えようとした。

⇒ 記述預言者を真の預言者として受け止めた古代ユダヤ人の歴史観が特徴的

申命記史書＝このような歴史観でヨシュア以降のイスラエルの歴史の記述だが同時にユダヤ人にとっては「(前の) 預言書」でもある

記述預言者＝(前の) 預言者とセットで一つの「預言者」としてとらえられている。そして、文学ではなく歴史認識のジャンルと見なされる。

古代ユダヤ人の歴史認識では

「トラー」から「預言者」を抜き出して区別しているが、「預言者」をマラキで終わらせている

これには理由があり、「預言の終わり」という時代認識がかかっている。

モーセ五書の編纂と「預言の終わり」

前述：モーセ五書の最終編纂の時期＞預言者たちの活動時期や申命記史書の編纂時期

疑問：預言者の活動がマラキで終わっているのはなぜか？

その後の時代にも預言能力(予知能力)のある人物がいるにもかかわらず、彼らは預言者としては認められていない。

理由：「預言の終わり」という考え方で歴史における「かつて」と「今」を分ける時代区分意識の表現ではないか

背景：エルサレム神殿に仕える大祭司を頂点としたグループは過去の「歴史」を基に自らの権威を不動のものにしようとした。

今後、神の声を聞く預言者が出現すると、過去の教えと整合性などの調整が必要で、場合によっては神殿の権威が脅かされる危険性がある。そこでモーセを最大の預言者として「モーセ五書」にしたがって歩むことで十分とすれば、今後預言者は不要である。

このような理由で、モーセを最大の預言者としてモーセの教えで十分、後は不要とするため「預言の終わり」を宣言したと思われる。

エルサレム神殿とトラーの2つの権威でユダヤ民族をまとめあげるとした。

【コラム：「ユダヤ教の祭司職」】

ユダヤ人の祭司職は世襲ということになっている。つまり血縁集団なのであるが、実際には、必ずしも血縁集団ではない時代があった。

その内部では大祭司>祭司>レビ人という3つに別れこの順で聖性の序列が形成されている。

大祭司はヘロデ時代まで続き、後70年の神殿崩壊まで続いた。

モーセ五書への系譜

預言者たちの活動結果 = 審判預言 + 救済預言 に集約できる

全体として 「罪」 → 「罰」 → 「救済」の流れになるが、

これをイスラエル民族史に当てはめたのが申命記史書で、ヨシュアの時代からヤハウエ神への背きそして国家滅亡への歴史をあらわし、やがて来る民の救済を展望する。

モーセ五書の編纂はこれらの預言者の記録と申命記史書の歴史記述にもとづいて後からなされたわけである。

その際、イスラエル民族が罪の結果諸民族へ分化してしまったことから、対象範囲を人類全体へと拡大して、救済は人類の再統合とし、イスラエルの選びはその役割を担うものとされた。

歴史は最終的に救済に向かうという救済史観でつながっている。

その意味で「モーセ五書」は究極の真の預言書である（ユダヤ民族にとって）。

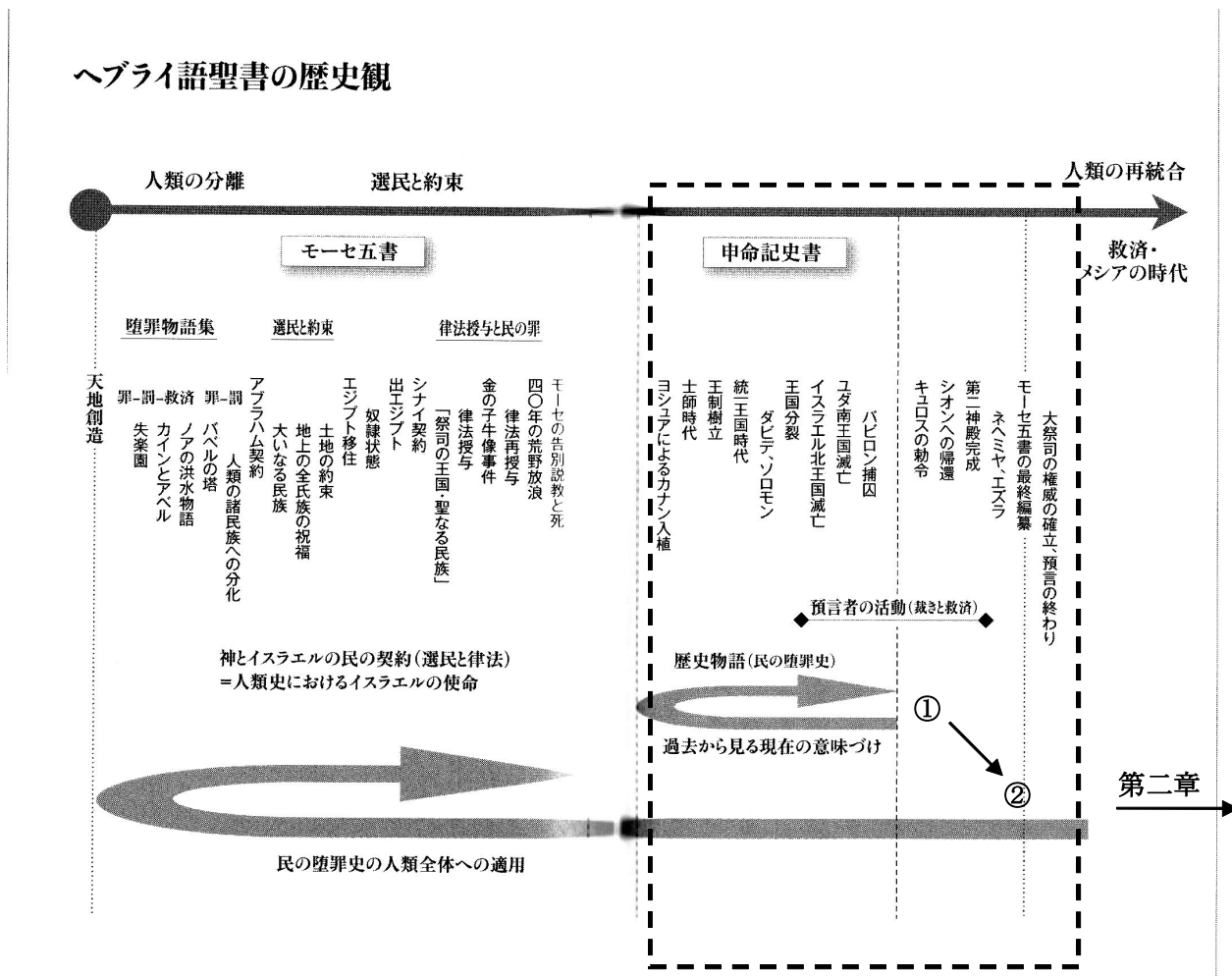
（注53で19世紀以降のキリスト教神学が、「普遍的であった預言者の宗教をモーセ五書が民族主義的・律法主義的宗教へと墮落させた」としてユダヤ教を全否定し、結果として無自覚に反ユダヤ主義に加担してきた事を批判。著者はモーセ五書は預言者の系譜で決して過激な民族主義に落ちていないと反論。）

【コラム：「四書、六書、九書？」】

モーセ五書の成立過程の研究中に五書で正しいのか疑問になり。ただいま研究中。（以下省略）

ヘブライ語聖書の歴史観

図参照 第1章の構成はこの図からも理解できる。



今回の読書範囲は点線枠の中にあたる。

① 申命記史書の時代では、王制への批判と王権の強化の間で揺れ動き、イスラエルの民の罪の結果としての罰（国家滅亡、捕囚）の原因を過去に見出し、救済を待つ現在を意味づけている。

② その後、モーセ五書を最終的に編纂して、対象を人類全体として、選民イスラエルの使命を再定義した。

この後は、預言者による審判は終わりとなり、大祭司による神殿体制が確立される(第二章へと進む)

読書後の感想まとめ

著者の目的は果たされているか：

・第一章は古代ユダヤ史を概観しつつ、ユダヤ教の伝統における聖書の三分の最初の二つ（「モーセ五書」と「預言者」）の大雑把な内容と成立経緯を解説する・・・確かにそう思う。

・全体としては古代ユダヤ思想史になるはず・・・申命記史家の歴史観について繰り返し説明があったそれだけ重要であるということだろう。

申命記史家の歴史観について：

あくまで神への忠誠が守られているかどうかに関心があり、背くことは罪、その結果裁かれ、罰が与えられ、民は苦しむ。この苦しみはしかしやがて救済されるはずというより強い神への信仰を生み出す。・・・いわば強力な宗教的エネルギーの自動再生装置であると思う（担う民族がある限りではあるが）。

だが弊害もある。人類の発展の歴史からみれば、民族が豊かになり大きな集団になれば、効率的な国家が必要になり、時代的に強い王による支配だとそれが実現できる為、王制へと進むことは必然。

なのに、王制に批判的な宗教があると、阻害されうまくいかない。ここに他民族・他国家にくらべてイスラエルの民が常に不安定な状態にあるという弱点を持ってしまう。・・・そうとしか思えない。

この弱点を当時の支配的階級をどのように考えていたかはよくわからないが、結果として王制支持派と批判派の妥協の産物として国家が運営されたことには変わりがない。王がより積極的な国家戦略をしようとしても、どこかで宗教との妥協しなければならなくなり、国の力は弱まる。・・・列王記における南ユダ王国の王たちに対する辛らつな評価を見ると、すぐれた政治感覚を持った優秀な王ほど、報われないのではないかと思う。

ダビデ王朝で、宗教+王制+国家を矛盾なく一体化できるイデオロギーの形成を試みたが、実際の国力を強化するには不十分で、イスラエルは侵略する側ではなくされる側になり、最後はバビロン捕囚に至る。・・・どう見ても（現代の我々から見れば）正しい結果で、何の不思議はないと思う。

長く捕囚が続くと、それを払拭するために、「罪」→「罰」→「救済」というサイクルはやがて人類全体を含む世界的な規模へと膨らみ、イスラエルは選民として使命を果たさねばならないという思想に至る。・・・正直この思想を理解し納得しその信仰を維持していくには、相当のエネルギーが必要だと思う。現代の我々からすれば、ヒステリックな妄想の拡大発展の繰り返しではないかと思う。

著者の力点：モーセ五書の編纂が後でなされた事を重要視

申命記史家の思想は、聖書が矛盾なく説明できるように最後にモーセ五書を編纂した。そしてそれを最大優先しなければならないパートとして格上げし、それだけで信仰が事足りてしまうほど力を持つとした。がそれはあくまで人間の手によるもの。・・・この事実から著者は「聖書」というものが、揺るがない聖性を持った不可侵の書ではなく、いかに多くの人の意図によって編纂されてきたのかということを実感してもらいたかったのではないか。あのモーセの五書がすべての聖典の最初にくるという事がそのことを示していると言われるとエッ！と驚いてしまう。

総合的な感想：・・・聖書を理解するには旧約聖書を理解することが必要、もっと言うと旧約聖書に象徴される古代イスラエルの民族の歴史およびその中でもまれた思想を理解することが本当に重要で
ると思った。

古代イスラエルの宗教思想は、のんびりとした現代日本の空気のような宗教観からは比べれば強烈過ぎるほどの印象を与える。そして逆境にあればあるほど、壮大で大規模な発想の転換をせまってくる。

こんなタフな人々たちというのは、本当にどんなことを考え生活していたのか、想像がつかない。
後続の第2章以下にも興味が引かれる。

その他、著者が重要視する問題提起がすでに随所で触れられはじめている。

「聖書」の暴力性につながる事柄・・・「義なる神」の登場、正義と倫理の絶対化が始まる
「代贖思想」・・・現代でこれを美談として説明に使うのは極めて危険（「靖国」と同じ）ある
「反ユダヤ思想」・・・キリスト教神学はユダヤ教より優れているとして無自覚に加担してきた。今も
「暴力性の起源」・・・ダビデ王朝イデオロギーに基づく「メシア(=ダビデの子) 預言」から

これらは、後のパートでより深く掘り下げられるのであろう。